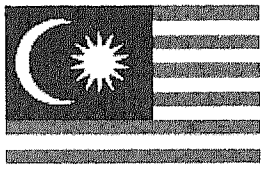
大切なもの、守っていくには



Malaysia

●担当教科：小学校全科
●実践教科：総合的な学習の時間
●時 間 数：２時間
●対　　象：小学５年生
●対象人数：63 名

栃木県　星 笑美子
宇都宮市立昭和小学校

〔1〕授業実践のテーマ・目的

45 時間の単元の中に、教師の体験をもとにした２時間のマレーシアに関する授業を取り入れ、下記の３つのねらいを持って学習を進めていく。このことから、世界へと目を向けることができ、さらに日本や身近な生活について考えることができるようにしたいと考えた。

・身近な地域の教材から学習に入り、世界へと視野を広げることができる。
・世界遺産の学習から自然を世界共通の大切なものとして守る大切さに気づかせる。
・生活習慣の違いを味わい、異文化への興味・関心を高める。

〔2〕授業の構成

時限	テーマ、ねらい	方法・内容	使用教材
事前	【世界遺産「日光」を知ろう】 郷土のすばらしさに触れ、そのよさを発信しようとする	・見学の計画 ・実際の「日光」見学・体験 ・まとめ，発表 ・保護のしかた，価値について	
1	【マレーシアの世界遺産 ～守っていくには～】 世界遺産の保護について知り、国を超えて保護する大切さに気づくことができる	・クイズ ・キナバル山が歌詞になったCDを聞く ・青年海外協力隊員の写真を見て外国の人も協力して保護していることを知る ・マレーシアの人の自然に対する思いや願いを知る ・自分たちが守りたいものを考える	・独自の植物の写真 ・マレーシアの地図 ・マレーシアの民族音楽のCD
2	【マレーシアの生活】 マレーシアが私たちにもつながりがあることに気づき、他国の文化を知って理解しようとすることができる	・衣装で登場し、マレーシアのあいさつと自己紹介をする ・子ども同士で５人とあいさつを交わす ・お菓子の袋や石けんからマレーシアと日本のつながりを考える ・グループで実物や写真から何に使われているものか考える ・異文化の人と生活するとき、どうすることが大切か考える ・グループから全体での話し合い ・気づいたことを共有する	・マレーシアの衣装バジュクロン ・お菓子の袋，石けん ・パームやし、日課表、お風呂の写真 ・トドン(頭にかぶる布)新聞、バティック(布)
事後	【外国の文化に親しもう】 自分が興味を持つ文化遺産、自然遺産について調べ、その国の文化について興味を持つことができる	・自分が興味を持った世界遺産を調べ、その国の文化についても調べる ・紙芝居やクイズにまとめ発表する ・選んだわけや価値についても考える	

〔3〕授業の詳細

1 次限目：
【マレーシアの世界遺産～守っていくには～】

「キナバル公園○×クイズ」を通して楽しみながら考えさせることで、世界遺産であるマレーシアのキナバル公園をイメージしやすくし、興味をもって授業に参加することができるようにした。

クイズ

Q：どちらが標高が高い？
①富士山　②キナバル山

Q：近くの町の名前となっているのは？
①コタキナバル　②クアラルンプール
③サバ

キナバル山が 1997 年に世界遺産に登録されたこと、山の標高、「コタキナバル」とはマレー語で「キナバル市」という意味であるということ、「サヤーンキナバル（愛するキナバル）」という歌もあるくらいこの山が先住民族から神聖な山として大切にされてきたことなどを補足しつつ、クイズの答えだけでなく、その背景を伝えることによって、より詳しく知ることができるよう配慮した。児童は自分たちの生活とのつながりも考えながらクイズに取り組むことができた。

【キナバル山】

【ラフレシア】

【ウツボカズラ】

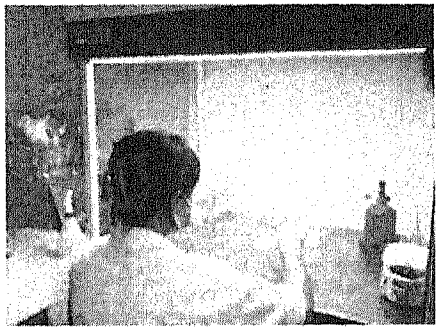
児童の反応

- ●きれいな景色だな。
- ●富士山はごみがあるから世界遺産に登録されていないと聞いたことがある。
- ●陽気な音楽だなあ。
- ●ラフレシアって 30 cmもあるほど大きいんだ。
- ●僕たちが吸っている空気にもキナバル公園が作る酸素が入っているかもしれないな。
- ●この森林がなくなったらまずいことになるんじゃないの。

次に世界遺産を守るためのキナバル公園での青年海外協力隊の活動の保護活動の写真を見て、何をしているところかグループで考え、付箋に書いていった。

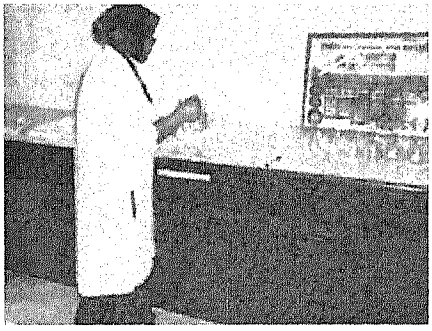
写真の内容

1　種を消毒している

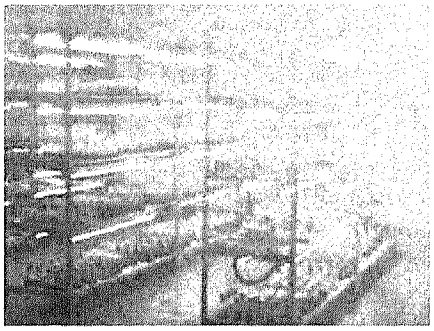


2　青年海外協力隊員がウツボカズラを持っている

3　培養液をフラスコに分けている



4　試験管の中で育てている温室



5　キナバル公園の教育長アリムさんが公園内を紹介している

児童の反応
- 作業の様子から植物を育てているところだと気づく児童が多かった。
- 植物の研究をしている。早く育つように手助けしている。
- マレーシアにしかない食虫植物を作っている。
- 品種改良して新しい品種を作っているところだ。
- 部屋の温度は植物にちょうどいいように設定している。
- 植物園をやっていて緑豊かにしている。公園をガイドしている。
- フラスコの中で絶滅危機の植物を救っている。

その国だけでなく他国も協力して環境を保護していることに気づかせ、国際協力の必要性を考えさせた。

問いかけ
なぜ、外国の人も協力しているのでしょう?

児童の反応
・世界遺産は地球みんなのものだから
・自然はその国の人だけのものじゃないから

また、種を変えずにそのまま残そうと努力していることにふれ、地元日光の世界遺産で長い時間をかけて修復していたのと同じことに気づかせ、そのまま残すことが将来にまで引き継いでいくことになることを教えた。そして、この熱帯雨林の自然を守っていきたい、もっと世界中の人に知ってもらいたいという思いを伝えた。

最後に、自分の生活をふり返り、自分がこれからもずっと守っていきたいものは何か考えさせた。「自然」という児童がほとんどだった。

2時限目：【マレーシアの生活】

マレーシアの民族衣装「バジュクロン」を着て児童の前に登場した。

「長袖で暑くないの？」

「マレーシアの人はもっと暑いんじゃない」と声が上がった。

「サラマッパギー(おはようございます)」とマレー語であいさつし、自己紹介をした。

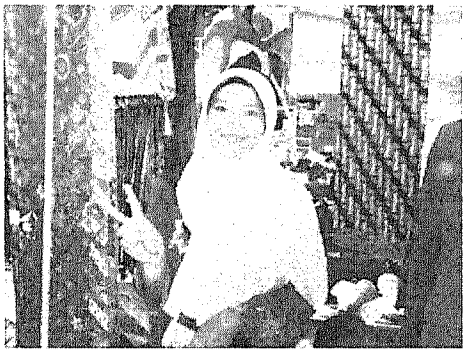
児童は、いつもと違う教師の服装に驚きながらもあいさつを返してくれた。「相手を敬う気持ちを表すため握手をして胸に手を当てるあいさつ」を児童にも実際に友達同士でさせた。

【民族衣装「バジュクロン」】

次に、お菓子の包装紙や石けんなどの生産国や原材料輸入国をじっくり見て、日本とマレーシアにどんなつながりがあるかを考えさせた。「ゴマ」「チョコレート」「ヤシ」「ヤシ油」「日本は植物油としてパームヤシ油を大量に輸入している」等々、日本とマレー

シアは意外なつながりがあることがわかった。

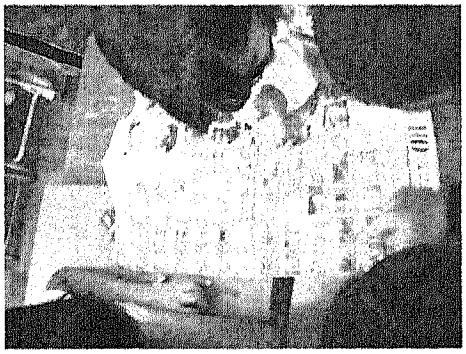
身近なマレーシアの文化をさらに知るために、マレーシアで手に入れた実物や写真を使って、実際に触れたり観察したりしながら使い方を考えた。



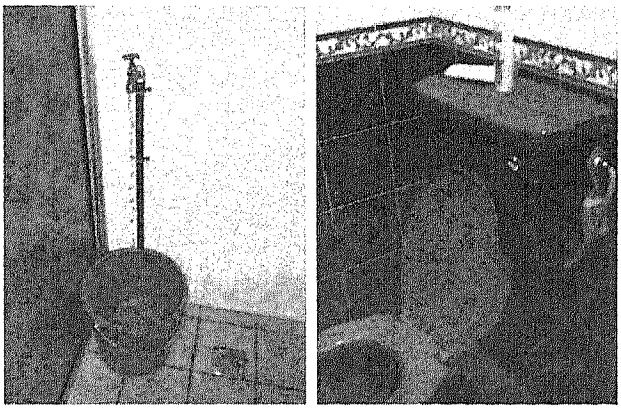
【トドン：イスラム教徒の女性が肌を見せないようにかぶる布】

【3ヶ国語の新聞：マレー語、中国語、英語】

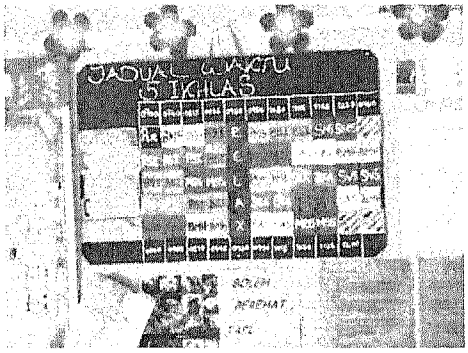
【バティック：サバ州の伝統的な柄】



【スーパーのチラシ：衣料品にはバジュクロンも載っている。お金の単位はRM（リンギ）】



【ホームステイ先のおふろ：バケツの中に手おけがあり、水道から水が出ている】



.【訪問した学校の日課表：朝7時から昼1時までの日課。学校や教師が少ないため半日交代制】

グループごとに、触ったり細かなところまで観察したりして、考えたことを発表する。

児童の反応

トドン：きれい。何かのお祭りの時に頭にかぶるもの。

新聞：台湾の新聞だと思う。台風のことが乗っている。日本人も載っている。

バティック：寝袋だと思う。（2人で布の中に入って使い方も試してくれた。）

スーパーのチラシ：チラシ。29，5円は安い。RMって何なのかよくわからない。

ホームステイ先のおふろ：お皿を洗うところ。お風呂かな。暑いから水風呂も気持ちいいから。

訪問した学校の日課表：時間割だ。リラックスは休み時間。始まりも早いけど終わりも早い。半日で学校が終わるのは涼しいときに勉強するからだと思う。

自分たちが考えた理由まで付け加えて話してくれる児童もいて、どうしてそう思ったかを聞いてみると一生懸命考え出してくれた。

ここでは、日本の生活との違いについて気づかせたかった。ただ違うことを伝えるのではなく、気候・宗教・歴史などの背景があって文化が異なる、など

補足した。マレーシアの生活から気づいたこと・感じたことをワークシートに記入した。児童たちは、日本との違いに驚いた様子だった。

マレーシアでは多民族が共生することから、異なる文化の人とともに生活する時、どんなことが大切かについて話し合った。

問いかけに対して、「はい」「いいえ」「真ん中」を選択して、教室の３つの場所に分かれ移動し、異なる言葉や生活習慣などを具体的に考えさせた。同じ選択肢のグループの中で理由を確認し発表しやすいようにし、その後、クラス全体で話し合った。

問いかけ
違う文化の人と生活するとき、自分のやり方で生活しますか？

児童の反応
【はい】
・わが道を行く。
・生活に慣れていないから普通に生活する。もし、やってみるように言われたら試してみる。
【いいえ】
・自分の文化も大切だけど、せっかくだから違う文化の生活も体験したい。
【真ん中】
・まずは、相手の生活に慣れてから、日本の生活を紹介したい。
・自分の生活を教えて、相手にも教えてほしい。２つのやり方をできるようにしたい。
・どちらの生活も大切だから、一緒にやっていきたい。

児童は同じ選択肢の中でも「こっち寄りかな」と場所を選んで移動していた。お互いの考えを聞いているうちに、グループ内でも理由が違うことに気づいたり、違うグループでも「それなら、真ん中寄りだな」と別な児童が判断したり、全員が立場を明らかにすることで一人一人考えを持ち、自然と学びあう雰囲気になり練り合う姿が見られた。改めてワークシートに記入した。３つの選択肢を与えた活動の後、考えが高められたのかしっかりと自分の意見を発表することができた。

ワークシートの問いかけ
異文化の中でともに生活する時、どうすることが大切だと思いますか？

児童のワークシートより
●協力し合えば、きずなが深まり、できないことができるようになる。
●どちらの文化もお互いに教えあって、体験してみることが大切だと思う。
●言葉はしゃべれないけど、違う国の人でも気持を伝えてこの国のことを好きになる。
●相手に合わせることも大事だけど自分の国の生活も大切にしたい。
●マレーシアの生活を体験してみたい。
●自分の国の文化も相手の国の文化も両方大切にして、認め合うのが大切だと思う。

〔4〕授業実践を終えて

１時限目では、自分たちの生活と環境とのつながりを意識することができた。国際協力の必要性や価値あるものを大切にしようとすることに気づかせることができた。後半の各自の調べ学習でも、自然遺産を選んで追究する児童が半数いた。文化遺産にとどまることなく、学びを深めるきっかけになった。

発表の中で、他にも日本の企業が建設に協力しているところがあるとか、自分にも何かできることを始めたいという感想を持つ児童も見られた。さらに、今後、社会科で環境について学習していくことになるが、興味を持って勉強してみたいという児童が多く見られた。

２時限目では、実物や写真から使い方を推測して考えることができた。取り扱うものが多かったので「生活」「学校」「文字」など観点を絞って与えると、違った意見も出てくるので、よりおもしろい反応が期待できただろう。

自分の考えはどれかを選んで移動するような活動を取り入れたことによって、一人一人が考えを持つことができ、話し合いでは自然な学び合いとなっていた。事前の授業では、書かせて終わりだったので、「親切にする」「優しくする」と人の接し方に留まってしまった。方法を改善することにより、話し合いが生まれ、考えに深まりが見られた。時間があれば、それぞれの立場で意見を述べた後、もう一度移動して考えを示して見ると、友達の意見からさらに考えが深まっただろう。

授業を終えた後、いろいろな国を調べてみたいという意見が出てきて、調べ学習の興味を持たせることができた。

校内研修とすることで、先生方にも見ていただき、国際理解教育の取り組みを知っていただく機会となった。見学していただいた先生方からは、「小学生では宗教を扱うのは難しく吟味しなければならない」、「生活のしかたは『他国に自分が行くか』『他国から人を迎えるか』によって違う」といった意見が出た。

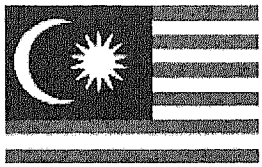
〔5〕参考文献（引用文献・参考資料）

- 『ESD 教材活用ガイド』 財団法人ユネスコ・アジア文化センター 2009
- 『ボルネオ熱帯雨林再生プロジェクト』（www.geocities.jp/borneorainforest/index.html）
- 『ヤシノミ洗剤と一緒に考えるエコ』（www.saita.net/saita/saraya0906/index.html）
- 『富士通キッズ「みんなで守ろう！世界の自然」』（www.saita.net/saita/saraya0906/index.html）
- 『世界遺産について』（www.elec.shonan-it.ac.jp/kamakura/isan.html）全て 2009/10 アクセス

〔6〕使用教材

- 『写真』
- 『マレーシアの地図』
- 『マレーシアの民族音楽ＣＤ』
- 『マレーシアの民族衣装バジュクロン』
- 『バティック（布）』

マレーシアの環境と人のつながり



Malaysia

●担当教科：特別支援学級
●実践教科：社会・理科・生活
●時 間 数：各学年１時間ずつ
●対　　象：小学１～６年生
●対象人数：15～21名

山梨県　加々美 浩子
北杜市立高根清里小学校

〔1〕授業実践のテーマ・目的

・人と環境の結びつき（2，3，4，6年）

地球上どこにでも美しい自然があって、そこには人が自然と共存して住んでいる。住んでいる人は、今より、よりよい生活を望んでいる。それは我々日本人も同じである。自然を守ることの大切さと、よりよい生活を営むバランスについて、どんなことなのか考えさせた。

・他国の人とわかり合うために（1，5年）

言葉や風習の違う、海外の人と積極的にわかり合おうとする気持ちを持ってもらいたい。

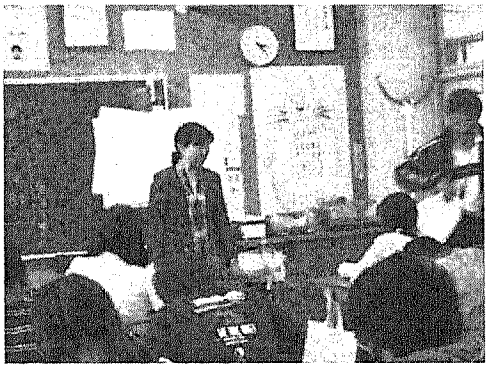
＊以上２つの内容について、それぞれの学年の実態に即して、授業内容、方法を考えた。

〔2〕授業の構成

時限	テーマ、ねらい	方法・内容	使用教材
1年	【日本語が通じない人と仲良くなるには?】 ・外国へ行ったときことばが通じない、その国の人と仲良くなるにはどんなことが大切か考える。 （生活科）	・みんなで、ことばが通じない人と仲良くなるためにはどんなことをすればよいのか考える。マレーシアの踊りを踊ってみる。ことばを話してみる。歌を聴いてみる。	パワーポイント サバ族の民族舞踊（動画） マレーシアの歌 「Ikan kekek」 テングザル･オランウータンのぬいぐるみ
2年	【マングローブの森・ドングリの森】 ・自分たちが慣れ親しんでいるドングリの森の役割と比較しながら、マングローブの森の役割を考える。 （生活）	・1年生の時に学習したドングリの森の恵みを思い出し比較しながら、マングローブの森の役割を考える。	パワーポイント・ぬいぐるみ 自作動画「テングザル」 「mangrove-world マングローブと人々の暮らし」
3年	【マングローブの知恵】 ・熱帯のマングローブ林の海水の中でも生きていける知恵を知る。 （理科）	・民族衣装から気候を考える。（モノランゲージ） ・マングローブの写真を見ながら、マングローブが海水でも生きていける訳を考える。	自作動画 「マングローブの葉の裏の味」「テングザル」 パワーポイント ぬいぐるみ
4年	【マレーシアのエコ活動】 ・マレーシアの学校のエコ活動紹介。自分たちの行っていることと同じということに気づく。地球に住んでいるみんなで協力して守っていく気持ちを育てる。 （社会）	・写真を通じてエコ活動を紹介。今年エコ活動をしてきたことを思い出し比較する。 ・生き物が住んでいくのには、環境が変化しないことが大切なことを、ゲームをもとに実感する。	パワーポイント 自作動画 「テングザル」 ぬいぐるみ

5年	【私が出会った青年海外協力隊員】 ・問題に突き当たった時の前向きな生き方について考える。 ・（道徳）	・青年海外協力隊の「10ヶ条」をもとに自分たちの「10ヶ条」を作る。	パワーポイント 【事例①】
6年	【マングローブの林とともに暮らすアワンさん】 ・人々の生活の保障とマングローブ林の保護の関係を考える。 （社会）	・アワンさんの暮らしを身近に感じさせながら、自然を守ることについて考える ・	パワーポイント 現地で撮ってきた動画「アブラヤシの収穫の様子」 【事例②】 ぬいぐるみ

〔3〕授業の詳細



○マレーシアで買ってきた民族衣装（バジュクルンもしくはバジュクガヤ）を着て全授業を行った。

○授業が終わった時に、マレーシアのお土産として切手（動植物）と説明を添えたものを配った。

＜切手に添えた説明文＞

切手には、その国が大切にしているものが多く使われています。

マレーシアの切手には、動物・植物・昆虫・自然が多く記念切手になっていました。マレーシアの中でもボルネオ島には、そこしかいない動植物が多く住んでいて、守っていく必要があります。

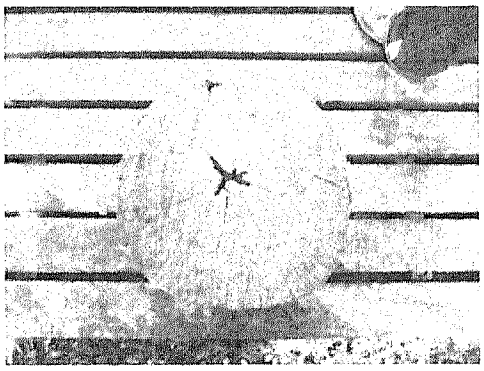
マレーシアの切手を見ながら、日本、山梨、清里ではどんなものを守っていったらいいのかどんなものを未来に残して行かなくてはならないのか考えてみましょう。　　加々美浩子

1年生：【日本語が通じない人と仲良くなるには？】

マレーシアの気候や住んでいる動物などの話をした。マレー語で挨拶をしてどんな感じがしたか聞いた言葉が分からずとても戸惑った児童が多かった。その後、マレーシアの人と仲良くなる（言葉が通じない人と仲良くなる）にはどうしたらいいかを考えた。児童から、自分たちのことを教えてあげるという意見が多かったが、話し合っていくうちに相手のことを知っていくことも大切であるという意見がでてきた。そこで、マレーシアの民族舞踊をみんなで踊った。さらに、マレーシアに行ったとき、役立つマレー語は何があるのか考えたとき「ありがとう」「こんにちは」「さようなら」が意見として出た。そこで、この3つの言葉を紹介した。

2年生：【マングローブの森・ドングリの森】

昨年学習した、学校の周りのミズナラの森での活動を振り返った。（草木染をした、動物のすみかになる）マレーシアの木の切り株を見せて日本の木とどこが違うのか尋ねた。年輪がないことや、冬がなく一年中温かいため葉が全部落ちることがないことを話した。買ってきたテングザルのぬいぐるみを見せて多くの生き物のすみかになっていることを話した。マングローブと人々の生活の結びつきを説明している動画（ウェブサイト mangrove-world）を見てマングローブが大津波から人々を救ったことを伝えた。

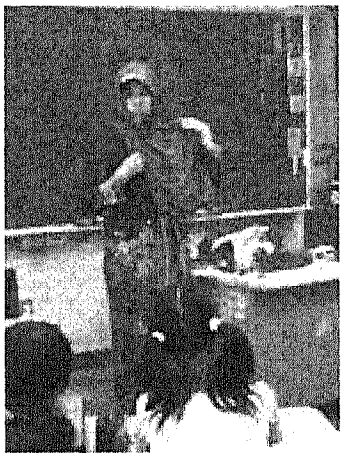


マレーシアの熱帯雨林の切り株

3年生：【マングローブの知恵】

マレーシアの気候を民族衣装から推測させた。涼しいから長袖という考えが多かった。イスラム教の女の人は、人に肌を見せないために長袖を着ていて髪の毛も見せないためトゥドゥンというスカーフ状のものを被る事を話す。授業感想に書いた児童も多かった。

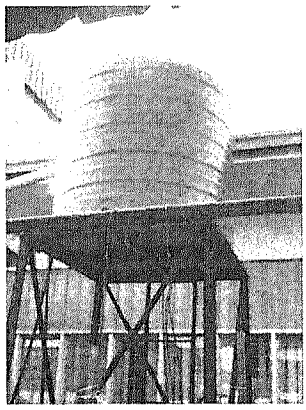
塩水でも生きていけるマングローブという種類のマレーシアを代表する植物を紹介した。なぜ塩水の中で生きていけるのか考えた。塩を捨てる、塩を根からすわないという考えが出た。



トゥドゥンをまとって

葉に塩分を貯めて捨てる

4年生：【マレーシアのエコ活動】



雨水タンク

グリーンカーテン

自然環境の要因が複雑に絡まり合ってその上に生き物は生きている。

マレーシアで行っている、エコ活動の写真を見せて、何をしているところか考えさせた。「どこかで見たこと無いか」と問うと今年自分達が行ってきたエコ活動と同じである事に気がついた。

その後、マングローブの森の役割と人々の生活との関わりを学習した。最後に自然環境は人間を含めた多くの生き物を守り育むために大切なことを体感した。

5年生：【私が出会った青年海外協力隊】

【事例①】

マレーシアで活動する青年海外協力隊の佐瀬さんが海外で活動が思ったように進んでいかないとき、自分の気持ちを落ち込ませないために書いた「自分を救う10ヶ条」を参考に5年生の「10ヶ条」を作った。

6年生：【マングローブの林とともに暮らすアワンさん】

【事例②】

アワンさんの豊かな生活をしたいという願いと、豊かな自然を守って行かなくてはならない葛藤にふれ、自然を守るということはどういう事なのか、あらためて考えてみた。

〔4〕授業実践を終えて

1·2年生では「感性」に、3·4年生では「知識」に、5·6年生では、「自らの行動」に訴えかけるようにと考えて学習内容を組んでいった。実践を終えていくつかの反省点を考えてみた。

- 伝えたいことを一つに絞り込むことができず、1時間しかない中にあれもこれもと詰め込んでしまった。学級の先生からは、マレーシアはどんな国なのかもっと教えて欲しかったという感想をいただいた。
- どの学年でも問題に対して真剣に考えてくれたことが嬉しかった。もっと子どもたちの考える感性を信じて、教師主導でなく子ども達に答えを任せるところがあっても良かったと思う。
- 1枚の写真から考えるフォトランゲージやグループでの話合いなど、さまざまな手法を使いこなせないままで授業をしてしまった。
- 誰でも出来る開発教育の教材を作ってみたかったのだが、そこまでは出来ず残念に思う。

以上のような点を踏まえつつ、これが始まりと考えこれからも学習していきたい。

〔5〕参考文献（引用文献・参考資料）

- 『地球をささえる熱帯雨林　熱帯雨林に生きる人びと』 エドワード・パーカー　すずき出版　2003
- 『ジャングル』 松岡達英　岩崎書店　1993
- 『世界の森林破壊を追う～緑と人の歴史と未来』 石弘之　朝日新聞社　2003
- 『破壊から再生へ　アジアの森から』 依光良三　日本経済評論社　2003
- 『熱帯雨林から、ヤッホー！』 八束澄子　新日本出版社　2000
- 『世界から貧しさをなくす３０の方法』 田中優　樫田秀樹　マエキタミヤコ　合同出版　2006
- 『世界森林報告』 山田勇　岩波新書　2006
- 『フィールドガイド　ボルネオ野生動物～オランウータンの森の紳士録』 浅間茂　講談社　2005
- 『月刊　たくさんのふしぎ（第268号）西表島のマングローブ』 横塚眞己人　福音館書店　2007/7
- 『森の力　日本列島は森林博物館だ！』 矢部三雄　講談社　2002
- 『月刊　たくさんのふしぎ（第271号）トルコのゼーラおばあさん、メッカへ行く』 新藤悦子　福音館書店　2007/10
- 『ヤシノミ洗剤ホームページ』（http://www.yashinomi.co.jp/index.html） サラヤ　2009/9
- 『mangrove-world』（http://www.mangrove-world.com/main.html） 東京海上日動　2009/9
- 『じゃらんじゃらん～青年海外協力隊・マレーシア・ソーシャルワーカーのブログ～』（http://sanaemalay.exblog.jp/） 2009/9

〔6〕使用教材

【事例①　「自分を救う 10 ヶ条」】

マレーシアで、佐瀬耕二郎さんという方に出会いました。この方は、青年海外協力隊としてマレーシアに二年間派遣されていました。環境教育を普及することが任務で、コタキナバルウェットランドセンターでマレーシア人の職員とともにマングローブ林の大切さを市民に伝えるプログラムを作っていました。

佐瀬さんは、マレーシアに来たばかりの頃は、こんなことを教えたい、あんなこともしていきたいと夢が広がり張り切っていました。しかし、どうも分かってもらえない、同僚の意識が高まっていかないと、気持ちがあせるばかりだったそうです。佐瀬さんが派遣されるまでに英語を勉強する研修もありました。しかし、マレーシアでは様々な民族が住んでいて、マレー語、マンダリン語（北京語）、ヒンズー語も使われていて、英語だけでは思うように気持ちが通じません。

「こんなことでは、あっという間に二年が過ぎてしまう。どうしたらいいのだろう」と佐瀬さんは、悩みました。

そんなとき、佐瀬さんは、自分の気持ちを落ち込ませないために、また問題を整理して考えるために「自分を救う 10 ヶ条」を書き上げかべにはりました。

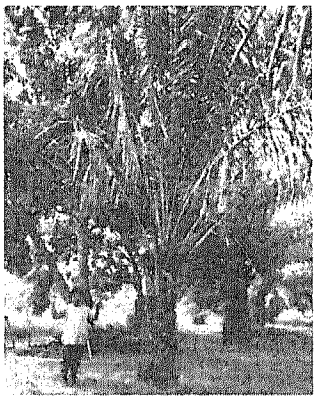
「自分を救う 10 ヶ条」

①顔をパンと両手で打つ
②気合いのボルテージを上げる
③セロトニンをたくさん出す
④簡単な方法で解決する
⑤パスする
⑥生きていることを楽しむ
⑦出来た後の喜びを想像する
⑧すべての事を進める
⑨自分を一番大切にする
⑩３食、風呂、洗濯、リズムを大切に

自分だけが自分を救える

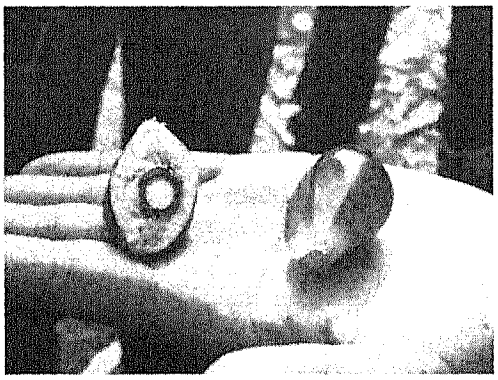
みなさんが佐瀬さんだったらどんな方法を考えますか。

【事例②　マングローブの林に生きるアワンさん】



【アブラヤシとアワンさん】

【アブラヤシの実】



【実の中身】

この写真に写っているのがアワンさんです。周りにあるマングローブの木を切って家を造り、周りに生えているニッパヤシで屋根をふいてある家に住んでいます。

アワンさんは、以前は、川に住む魚をとって暮らす漁師でした。近くの人が畑にアブラヤシを植えて生活が豊かになっているのを見て、自分もアブラヤシを育てようと考えたそうです。

アブラヤシを育てると一年を通して安定した収入

を得ることが出来るようになりました。また、作業も漁師より楽だそうです。収入が安定したため、車も買うことが出来ました。子どもも上の学校に行かせたいと考えるようになりました。

【水上集落・アワンさんも以前はこんな家に住んでいた】

【カニクイザル】

もっと働いて、お金をたくさんもうけたい。そう考えたアワンさんは、どうしたと思いますか。

収入を増やすためにもっとアブラヤシの畑を増やそうと考えました。

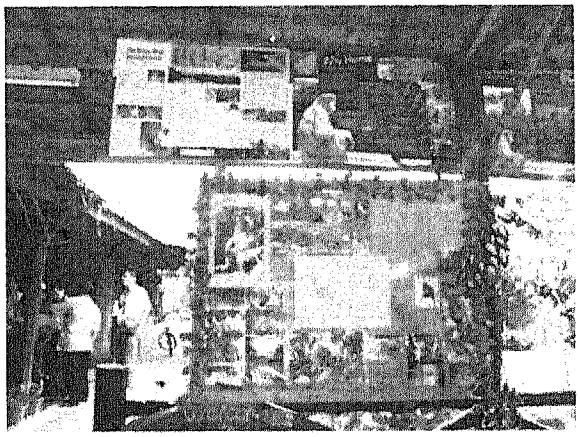
ところが、アワンさんが切り開こうと考えていたマングローブ林は、貴重な動植物を守るために切ってはいけないと、マレーシア政府からストップがかかりました。動植物を守っていくためにも広い面積でつながったマングローブ林が必要なのです。

そこで、アワンさんはどうしたと思いますか。

アワンさんはマングローブ林に住む動植物を人々に紹介する仕事を始めました。これは、エコツーリズムといって、自然を壊さずに、そこに住んでいる人の生活も変えずにお金が入ってくるので様々な場所で行われています。

アワンさんは、旅行会社と協力してお客さんを呼んで船で川を案内しています。お客さんは、いつも来るわけではありません。アブラヤシ畑を増やしたほうがお金が入ってきます。

でも、アワンさんは、アブラヤシ畑の仕事と川の案内の仕事と両方とも好きだそうです。毎日働ける畑も好きですし、旅行者をもてなしてお世話するのも好きなのだそうです。



【アワンさんの家のゲストハウス】